

# カント倫理学において意志の弱さはいかにして可能か

千葉 建

わたし〔パウロ〕は、自分のしていることが分かりません。自分が望むことは実行せず、かえって憎んでいることをするからです。もし、望まないことを行っているとすれば、律法を善いものとして認めているわけになります。そして、そういうことを行っているのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです。わたしは、自分の内には、つまりわたしの肉には、善が住んでいないことを知っています。善をなそうという意志はありますが、それを実行できないからです。わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている<sup>(1)</sup>。

わたしたちは時として、なすべき最善のことを知っていながら、それに反して行為することがある。たとえば、原稿の締切を守るべきなのに、それ以外の楽しみのために時間を使ったり、喫煙は健康に悪いと知っていながら、禁煙の約束を破ってしまったりすることは、日常にありふれていると言ってよかろう。こうした現象は「意志の弱さ」(akrasia, weakness of will) や「道徳的弱さ」(moral weakness) と呼ばれ、古代から現代に至るまで、さまざまな哲学的議論の対象になってきた。それはそもそも意志の弱さがいかにして可能なのかを概念的に理解することが思いのほか難しいだけでなく、それがわたしたちの人間観の根幹に触れる実践的な問題でもあるからだと思われる。

本稿は意志の弱さをめぐる現代的論争には立ち入らず、その問題を考えるための一助としてカント倫理学における意志の弱さの問題を考察したい<sup>(2)</sup>。そのさい導きの糸として、アリソンが『カントの自由論』で「取り込みテーゼ」(incorporation thesis)<sup>(3)</sup>に基づいて意志の弱さを「自己欺瞞」(self-deception)として解釈したことを取り上げ、それに対するバロンの批判を検討する(第一節)。次に、意志の弱さを「決意が固くないこと」(irresoluteness)として解釈したフライアーソンの見解を紹介し、その意義と問題点を指摘する(第

二節)。最後に、カントが『たんなる理性の限界内の宗教』〔以下『宗教論』と略記〕で意志の弱さを扱った「原罪論」の観点からアリソンとフライアーソンの立場を再検討し、意志の弱さに関するカントの見解を再構成したい。

### 第一節 「自己欺瞞」としての意志の弱さ

周知のように、カントの倫理学によれば、「傾向性」ではなく「義務」に基づく意志だけが道徳的に善である。しかもそうした善い意志だけが、自らの格率を通じて立てた普遍的法則にしたがう自律のゆえに、現象界の自然法則から自由な意志であるとされる。しかし、もしこの通りだとすれば、傾向性に基づく道徳的に悪い行為は、自然法則にしたがって生じた自然の出来事にすぎず、それゆえ道徳的な責任を帰せなくなってしまうのではないか。こうした悪への自由とその責任をめぐる問題を解く鍵となるのが、カントが『宗教論』で主張し、アリソンが「取り込みテーゼ」と呼んで有名になった次の一節である<sup>(4)</sup>。

選択意志の自由はまったく独特な性質をもっており、選択意志がなんらかの動機によって行為へと規定されうるのは、人間がその動機を自分の格率のうちに採用した（振舞おうとするさいにしたがう自分の普遍的規則にした）かぎりだけなのである。（VI 23f.）

アリソンによれば、この取り込みテーゼにしたがえば、①傾向性や欲望はそれだけでは行為する理由にならず、格率や規則に関連づけて初めて行為する理由となり、②格率や規則の採用そのものは、ある欲望状態からの因果的な帰結とはみなせず、行為者の自発性の働きだと考えなければならない（cf. Allison 1990: 40 [邦訳: 74]）。つまり、傾向性に基づく悪い行為も、その傾向性を格率のうちに採用した主体の自由な行い（カントの表現では「可知的行い」（VI 39））によるものだとなさるので、その責任を問うことができる、というわけである。それゆえアリソンの取り込みテーゼは、カントの自由論に対するラインホルト以来の古典的な疑問に対して解決の糸口を与えてくれる有力な議論だと思われてきたのである。

これに対して、バロンは「自由、脆弱さ、不純さ」（Baron 1993）でアリソンの『カントの自由論』にいくつかの疑義を呈したが、なかでも興味深いのは、取り込みテーゼが意志の弱さと両立しないのではないかという懸念である。バロンの議論を要約すれば以下の通りとなろう。意志の弱さとは、道

徳法則の要求にしたがって正しい行為をしようと決意しながら、悪い行為をしてしまうことを意味する。しかるに、取り込みテーゼによれば、いったん道徳法則を動機として格率のうちに採用したならば、それ以外の傾向性や欲望によって悪い行為へと規定されることはありえないはずである。だとすれば、取り込みテーゼは意志の弱さの可能性を否定するように思われる。ところがカント自身は、『宗教論』で「悪への性癖」の三段階を論じるさいに、その第一段階として「人間の心情の弱さ」ないし「人間本性の脆弱さ」に言及することで、意志の弱さを認めていた、というのである<sup>(5)</sup>。そこで問題はこの「脆弱さ」をいかに解釈するにかかってくる。

アリソンも『カントの自由論』で取り込みテーゼと意志の弱さが一見両立しがたいことを認めながら<sup>(6)</sup>、意志の弱さがある種の「自己欺瞞」として解釈しようとする。

ここで弱さと呼ばれた、誘惑への屈しやすさは、自分の感性的本性の要求にもともと優先権を認めていたことの直接的な帰結である。言い換えれば、道徳原理が傾向性の要求と衝突するとき道徳原理にしたがうだけの十分な強さがないと称される事態とは、初めから道徳原理に完全なコミットメント (full commitment) をもっていなかったことの反映である。したがって自己欺瞞がまさに最初から関与しているのであり、本当は自分で自由に評価したものなのに、自分には責任がない「弱さ」だと言うのである。(Allison 1990: 159 [邦訳: 303])

取り込みテーゼによれば、感性の側からどれほど強力に誘惑されようとも、自ら格率のうちに採用しないかぎり、その誘惑に屈することはありえない<sup>(7)</sup>。だとすれば、「自由な行為者としてわたしたちが誘惑されるとすれば、それはいわば誘惑されることを自分に許しているからにほかならない」(Allison 1990: 164 [邦訳: 312]) というわけである。しかし、意志の弱さをこのように自己欺瞞として解釈するのは、カントが『宗教論』で指摘し本稿のエピグラフにもした使徒パウロの嘆きの解釈としては無理があるのではないか。つまり、「善をなそうという意志はありますが、それを実行できない」という嘆きは、アリソンの言うように「弱さに訴えて言い訳をしている」(Allison 1990: 159 [邦訳: 304]) のではなく、まさに「道徳法則に対する真のコミットメント」(Baron 1993: 435) をもっていることの証左ではないか<sup>(8)</sup>。こうした批判に応じてアリソンは、たしかに自分の解釈が使徒の言葉と等しいよ

うには見えないかもしれないと認めながら、しかし意志の弱さを取り込みテーゼと両立させるには、この言葉を自己欺瞞として理解するしかない、と自らの主張を繰り返すのである (Allison 1993: 455-56)。

こうしたアリソンとバロンの論争から明らかになるのは、アリソンが意志の弱さを「動機づけの問題」(motivational problem) というよりも、むしろ「認識の問題」(epistemic problem) として見ているということである (cf. McCarty 1995: 587)。アリソンの考えにしたがえば、道徳法則を格率のうちに採用し、何が正しい行為なのかを完全に認識しているかぎり、そこから逸脱する可能性はないはずである。もし道徳法則から逸脱するようなことがあるなら、それは道徳法則をそれだけで十分な動機として格率のうちに採用しておらず、傾向性を動機として採用しているからにほかならない。したがって、道徳法則から逸脱しておきながら、道徳法則に完全にコミットしており、傾向性にはコミットしていないと称するのは、自己欺瞞 (あるいはむしろ自己認知の歪み) としか言いようがない、というわけだ<sup>(9)</sup>。これに対してマッカーティーは、カントが『宗教論』で先のパウロの嘆きを次のように解釈するとき、カント自身は意志の弱さを「動機づけの問題」として考えていたと主張する (cf. McCarty 1995: 589)。

わたしは善 (法則) を自分の選択意志の格率のうちに採用しているが、しかしこの善は、客観的に理念上は (in thesi) 克服されえない動機であるのに、格率を遵守すべき場合になると、主観的には (in hypothesi) (傾向性に比して) 弱い動機になってしまう。(VI 29)

この引用に示されているように、カントは、道徳法則を格率のうちに採用していながら (すなわち道徳法則に完全なコミットメントをもちながら)、それを遵守することができないという点に意志の弱さを見ていたように思われる<sup>(10)</sup>。それゆえ、カントのいう「脆弱さ」が意志の弱さのことであるとすれば<sup>(11)</sup>、バロンが示唆するように、アリソンは取り込みテーゼと意志の弱さを両立させる方法を見いだしていないと結論せざるをえない (Baron 1993: 435)。つまり、意志の弱さを「自己欺瞞」として解釈するのは、カントのテキストに即するかぎり、やはり無理があると言えよう。

## 第二節 「決意が固くないこと」としての意志の弱さ

それでは取り込みテーゼを受け入れながら、意志の弱さを認める道は残されていないのだろうか<sup>(12)</sup>。アリソンの解釈は、取り込みテーゼにしたがうなら、いったん格率のうちに道徳法則を採用すれば、道徳法則を動機として行為へと導かれるはずであり、反法則的な行為へと動機づけられるとすれば、初めから道徳法則よりも自己愛を優先する格率を採用していたにちがいない、というものだった。アリソンがこうした解釈が不可避だとみなしたのは、法則採用と法則遵守のあいだに「時間的な隔たり」(temporal gap) (Frierson 2014: 241) がある点を考慮していなかったためだと考えられる<sup>(13)</sup>。しかし、初めは道徳法則を完全に格率のうちに採用していながら、その後、道徳法則を遵守せず行為してしまう、という可能性も考えられるのではないか。本節では、こうした方向から意志の弱さを論じたフライアーソンの解釈を検討し、その意義と限界について評価したい。

フライアーソンは、ホルトン (Holton 1999: 241) にしたがって「意図」(intention) の概念を導入し、さしあたり次のように述べる。

意志の弱い人とは、〈ちょうどいま (right now) 善を自分の格率のうちに採用しながら、善に反して行為する人〉ではなく、むしろ〈過去に (in the past) 善を自分の意図のうちに採用したが、いまになってこの意図を十分な理由もなしに改める人〉である。(Frierson 2014: 240)

こうした見方によれば、意志の弱さとは、アリソンの言うように自己欺瞞なのではなく、「決意が固くないこと」(Frierson 2014: 241; Holton 1999: 241; Hill 2008: 223) だと解される。フライアーソンはこうした解釈を「有望な一案」(Frierson 2014: 240) とみなし、これを精緻化しようとしている。まず、ここで言われる「意図」とは、意志の弱さがたんなる心変わりではないとすれば、その時々の特異な意図ではなく、カントの「格率」の概念に含まれるような一般的な意図であり、「方針となる意図」(policy intention) (Frierson 2014: 241; Holton 1999: 246) でなくてはならない<sup>(14)</sup>。つまり、意志の弱い人は、傾向性よりも道徳法則を優先する格率を採用しているが、たんに「方針となる意図」においてそうしているだけであり、実際にこの意図に基づいて行為する段になると、この意図を放棄して、決意が揺らいだ状態に陥ってしまう、というわけである (Frierson 2014: 242)。さらに、先に定式化したホルトンのモデルでは、過去の意図から現在の意図に変わっただけで、二つの

意図が衝突しない——つまり、たんなる心変わりにすぎず、意志の弱さではない——という場合が生じてしまうように思われる。そこでフライアーソンが導入するのが、意図よりも安定的で首尾一貫した「性格」(character) (Frierson 2014: 243) である。フライアーソンによれば、「ひとは一定の格率にしたがって行為するよう「意図する」とき、ある性格を構成することになる。そしてこの性格こそが自分自身を当の行為者 (agent) として定義するものである」(Frierson 2014: 243)。だとすれば、意志の弱さを経験するとき、それはたんなる心変わりということではなく、首尾一貫した行為者であることができないということの意味する。言い換えれば、意志の弱さは、「私」という人格の核にある「性格」を毀損する事態であり、私のアイデンティティーが揺さぶられる経験なのである<sup>(15)</sup>。

以上のようなフライアーソンの解釈は、アリソンの解釈よりもカントのテクストの内在的な解釈として整合的であり、また「意志の弱さ」という現象の説明としてもかなり説得力があるように思われる。しかしフライアーソンの解釈にも問題がある。それはこの解釈が一見すると取り込みテーゼと両立しがたいように見える点である。というのも、取り込みテーゼにしたがえば、自らの格率(ないし「方針となる意図」)を通じていったん道徳的な性格を形成したならば、選択意志は格率のうちに採用していない傾向性(あるいは傾向性を優先する動機)によって行為へと規定されることはありえないはずであり、それゆえ悪い格率を採用する根拠もないように思われるからである。こうした問題に対してフライアーソンは、取り込みテーゼの適用範囲を制限し、傾向性によって格率が改変される可能性を認めることで応答する。彼によれば、意志の弱さの場合には、道徳法則を実践的原理としている人が、行為にさいして傾向性に圧倒され、別の実践的原理を採用し、この新たな原理にしたがって行為してしまうのだとされる (cf. Frierson 2014: 245)。しかもこうした傾向性のはたらきは、「無意識の因果的な力」(unconscious causal forces) (Frierson 2014: 246) であり、理性の考慮を経たものではない、というのである。しかしこうしたフライアーソンの解釈は、取り込みテーゼの有する利点を著しく損なうものである。つまり、取り込みテーゼは、悪い格率の採用を、なんらかの因果的な力ではなく、行為者の自由な選択意志に帰することによって、悪い行為の責任を問うことを可能にするものであったが、フライアーソンの解釈ではこうした行為の責任の問題について別の説明をしなくてはならないのである。

それではフライアーソンは行為の責任をどのように説明するのか。フライ

アーソンは以下のように説明する。人間が道徳的に責任を問えるのは、上位認識能力や上位欲求能力をもつことによってである (Frierson 2014: 249)<sup>(16)</sup>。しかるに、意志の弱い人はその両能力をもっており、自らの格率を通じた道徳法則の認識に基づき、上位欲求能力(意志)によって動かされる (cf. Frierson 2014: 254)。それゆえ、意志の弱い人は、道徳的責任を問える存在である (Frierson 2014: 255)。だが、意志の弱い人は、「真の意味での性格に必要とされる首尾一貫性を欠いているがゆえに、実際には一個の意志というものをもっておらず、まさにそれゆえそうした格率は実のところ自分の意志の格率とはいえない」(Frierson 2014: 255)。つまり、「性格が行為の実践原理への確固たるコミットメントであるかぎり、意志の弱い人は性格をもたないのである」。

以上のようなフライアーソンの説明は、結局のところ、意志の弱い人が道徳法則に確固たる完全なコミットメントをもっていなかったみなすものであり<sup>(17)</sup>、この点ではアリソンの説明と一致する。したがってフライアーソンの説明にも、意志の弱い人が道徳法則への真のコミットメントをもっているはずだとするバロンの批判が妥当するように思われる。フライアーソンは、意志の弱い人が道徳法則(ないし方針となる意図)に反して行為するのは、それへのコミットメントが不十分だったからだと解釈するが、それは意志の弱い人が悪い行為をした後で、事後的にその原因として決意が固くなく、性格が不十分だったからだと言っているにすぎず、意志の弱さはいかにして可能か、すなわち、道徳法則への完全なコミットメントのもとでそれに反する行為はいかにして可能か、という問いには満足のゆく答えを与えてくれないのである。

### 第三節 「取り込みテーゼ」と「決意が固くないこと」との両立可能性 (irresoluteness incorporated)

以上見てきたように、アリソンのように取り込みテーゼによって意志の弱さを自己欺瞞として解釈するのも、フライアーソンのように決意が固くないこととして意志の弱さを解釈するのも、完全なコミットメントのもとで意志の弱さがいかにして可能かを説明できないという問題があることが分かった。本節では、カントが『宗教論』で意志の弱さを扱った文脈である「原罪論」という観点からこの問題を再考し、それを通じてアリソンとフライアーソンの見解の両立可能性を探りたい。

カントは悪い行為が人間の自由な選択意志によるものであることを示す物

語として聖書の原罪の話を解釈する。そのさい「神の命令としての道德法則からの違反としての罪 (Sünde)」(VI 42) について次のように述べる。

人間は、十分な動機としてこの法則に……素直にしたがうかわりに、たんに条件つきで……善でありうるような他の動機も探しまわり（『創世記』3章6節）、……義務からではなく、せいぜい他のさまざまな意図への顧慮から、義務の法則にしたがうことを自らの格率にした。したがって人間はこれとともに、他のいかなる動機の影響も排除してしまう命令の厳しさを疑い始め、次に命令に対する服従を、たんに（自愛の原理のもとにある）条件つき的手段的な服従にまで引き下げようと理屈をこね始め、それからついには感性的衝動のほうが法則からの動機よりも優位であることが行為の格率のうちに採用され、かくして罪が犯されたのである（『創世記』3章6節）。(VI 42)

ここに示されているように、カントにとって罪は、道德法則よりも感性的衝動を優先する格率を採用することである。さらに注目すべきは、カントが原罪について、「時間的にいえば、[原罪を引き継いだ] 私たちのもとでは違反への生得的な性癖が前提とされるが、最初の人間〔アダム〕のもとでは、そうした性癖ではなく、罪のない無垢が前提とされる」(VI 42) と語っていることである。カントが説明するように、ここで悪への「生得的な性癖」が持ち出されるのは、「もし私たちが悪をその時間的な始まりに関して説明しようとするなら、故意の違反はどれもその原因を、私たちの人生の過去の時代 (vorige Zeit) に、それも理性使用がまだ発達していなかった時代にまで遡って追究しなくてはならない」(VI 42f.) からである。つまり、アダムならぬ私たちは過去に採用した悪い格率のままに生きていくことがデフォルトの状態だと考えられているのである。

そうした「生得的な悪性」(VI 42) を抱えながら、善への「根源的素質」(VI 43) も有する私たちが善なる格率に対するコミットメント——カントの表現では「心術」(Gesinnung)——をもち続けることは一種の「回心」(Sinnesänderung) (VI 66) だと言える。しかし、パルムクイストも指摘するように、人間の脆弱さは宗教的な回心を経験した人においても存在し続けるものである (Palmquist 2016: 77)。冒頭に引用した使徒パウロの嘆きがまさにそのことを証していると解釈することができる。回心した人も意志の弱さを完全には免れることができないのは、人間が道德法則だけではなく傾向性も動機とし



て採用してしまう神聖ならざる存在である以上、善は善だけで単独に働くことはできず、悪との「実在的対立」の末に現れるものだからだと考えられる。次のカントの発言は、選択意志が道徳法則を遵守できないという意志の弱さの説明としても読むことができるように思われる。

私たちのうちには動機 = a [道徳法則] があり、したがって、この動機と選択意志との一致の欠如 (= 0) は、ただ選択意志の実在的に対立した (realiter entgegengesetzt) 規定の結果、すなわち選択意志の反抗 = - a の結果としてのみ可能であり、つまり悪い選択意志によってのみ可能である。(VI 22)

意志の弱い人が、一時的にせよ、道徳法則に反した行為をなしてしまうのは、悪い選択意志、つまり悪い格率の採用のためであり、その意味ではやはり取り込みテーゼは正しい。しかし意志の弱い人は、アリソンの言うように、本当は悪い格率しかもっておらず、自己欺瞞に陥っているわけではなく、それと実在的に対立する道徳法則の効力ももっていたと考えられる。この意味ではフライアーソンが、過去に遡って善い意志の採用を想定するのは正しい。しかし意志の弱い人とは、フライアーソンの言うように、以前に善い格率を採用していたのに、新たに採用した悪い格率にしたがって行為する人なのではなく、さらに遡る過去に悪い格率を採用し、その後に関心して善い格率を採用しておきながら、行為の瞬間に以前の悪癖に屈して、悪い格率にしたがって行為してしまう人だと言うべきである。つまり、意志の弱い人は決意が固くないことの根拠を自らの格率のうちに採用しているのである。カントによれば、人間は道徳法則と感性的動機の「両方の動機を自分の格率のうちに採用している」(VI 36) ので、人間が善であるか悪であるかの違いは、道徳法則と感性的動機の「どちらを他方の条件にするかという主従関係 (格率の形式)」(VI 36) の違いに存する。したがって、「人間が (最善なる人間も) 悪であるのは、両方の動機を自分の格率のうちに採用するさいに、両動機の道徳的序列を逆転させるからにはかならない」(VI 36)。つまり、本来は道徳法則を主とし、感性的動機を従とすべきなのに、それを逆転してしまうところに悪が生じる。ここでカントが「最善なる人間」も悪である可能性に言及しているように、「悪性に向かう性癖は根絶不可能 (unvertilgbar) であるがゆえに、これに不断に対抗し続けなくてはならない」(VI 51) ものなのである。

それでは、最高の善人すなわち回心した人もときに悪い格率を採用し、悪人に転化しようという事態はいかにして可能なのだろうか。この問題を考えるうえでは、格率の根本が腐敗している人間がいかにして自力で善い人間たろうるかを説明している箇所が参考になる。

これが調和しようには、考え方には革命 (Revolution) が必然的だが、(考え方を妨害する) 感じ方には漸進的改革 (allmähliche Reform) が必然的であり、したがってそれが人間にとっても可能であるのではなくてはならない、とするしかない。すなわち人間は、自分がかつて悪い人間であったゆえんの自らの格率の最上根拠をただ一度の不動の決意によって逆転させる (そしてこれによって新しい人間を着る) とき、その限りでは原理と考え方に関して善を受け入れることの可能な主体であるが、ただ絶えざる活動と生成 (Wirken und Werden) のなかでのみ善い人間なのである。言い換えれば人間は、自らの選択意志の最上格率に採用した原理がそのように純粹で堅固であるとき、自分は悪い者からより善い者へと常に進歩していくための (狭くも) 善い途上にいるのだ、という希望をもつことができるのである。(VI 47f.)

つまり意志の弱さは、回心した人がいったん可知的な行いによって善い格率を採用したとしても、時間的に生成する可感的な世界のなかで、かつて採用し習い性となった悪い格率に流されず、善い格率を堅持してゆくことの困難さから生じているように思われる。カントが上の引用に続けて言及するように、格率の可知的な根源を見通すことのできる「神」の視点からすれば、ある人の格率が善か悪かは一義的に決まるはずである (cf. VI 48)。しかし、それを時間のなかでしか評価できない「人間」の視点では、「この変化はより善い者になろうとする不斷の努力として、したがって倒錯した考え方としての悪への性癖の漸進的な改革としてみなされなくてはならない」(VI 48) のである。私たちは「古い人間」を脱ぎ捨て、「新しい人間」になったように思っても、それが真実かどうかは究極的には分かりえない。私たちは道徳的改善への不斷の努力のうちにのみ道徳法則への真のコミットメントを推察することができるだけである。いずれにせよ、古い人間と新しい人間の双方が私のアイデンティティーを形作っている、と言うことはできよう<sup>(18)</sup>。そうだとすれば、意志の弱さとは、より善き人間になるという未来への希望と、影のようについて回る過去の悪癖とに引き裂かれながら、現在を生きる私た

ちの一つの在り方であり、そうした弱さを抱えた自分自身と真摯に向き合おうと努力し続けるなかでしか克服しえないものなのである。

## 凡例

カントからの引用はアカデミー版カント全集を用い、慣例にしたがって、巻数をローマ数字、頁数をアラビア数字で記す。

それ以外の引用は以下の参考文献にしたがう。

## 参考文献

- Allison, Henry E. (1990) *Kant's Theory of Freedom*. Cambridge, Cambridge University Press. [ヘンリー・E・アリソン『カントの自由論』城戸淳訳、法政大学出版局、2017年。]
- (1993) “Kant on Freedom: A Reply to my Critics,” *Inquiry: An Interdisciplinary Journal of Philosophy*, 36, 443-464.
- Baron, Marcia W. (1993) “Freedom, Frailty, and Impurity,” *Inquiry: An Interdisciplinary Journal of Philosophy*, 36, 431-441.
- (1995) *Kantian Ethics Almost Without Apology*, Ithaca, N.Y., Cornell University Press.
- Baumgarten, Hans-Ulrich (2002) “Acting Against Better Knowledge: On the Problem of the Weakness of the Will in Plato, Davidson, and Kant,” *Journal of Value Inquiry*, 36 (2-3), 235-252.
- Bratman, M. (1987) *Intention, Plans, and Practical Reason*, Cambridge, Harvard University Press. [マイケル・ブラットマン『意図と行為——合理性、計画、実践的推論』門脇俊介、高橋久一郎訳、産業図書、1994年。]
- Denis, Lara (2013) “Virtue and Its Ends,” in A. Trampota, O. Sensen, and J. Timmermann (eds.), *Kant's “Tugendlehre”: A Comprehensive Commentary*, Berlin, de Gruyter.
- Frierson, Patrick R. (2014) *Kant's Empirical Psychology*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Hill, Thomas E., Jr. (1986) “Weakness of Will and Character,” *Philosophical Topics*, 14 (2), 93-115.
- (2008) “Kant on Weakness of Will,” in T. Hoffman (ed.), *Weakness of Will from Plato to the Present*, Washington, DC, Catholic University of America Press, 210-30.

- Holton, R. (1999) "Intention and Weakness of Will," *Journal of Philosophy* 96, 241-62.
- Johnson, Robert N. (1998) "Weakness Incorporated," *History of Philosophy Quarterly* 15, 349-67.
- Korsgaard, Christine M. (2009) *Self-Constitution: Agency, Identity, and Integrity*, Oxford, Oxford University Press.
- McCarty, Richard (1995) "Moral Weakness as Self-Deception," in H. Robinson (ed.), *Proceedings of the Eighth International Kant Congress*, Milwaukee, WI, Marquette University Press, 587-593.
- (2009) *Kant's Theory of Action*, Oxford, Oxford University Press.
- Palmquist, Stephen R. (2016) *Comprehensive Commentary on Kant's Religion within the Bounds of Bare Reason*, Chichester, Wiley Blackwell.
- Reath, Andrews (2006) *Agency and Autonomy in Kant's Moral Theory: Selected Essays*, Oxford, Oxford University Press.
- Rawls, John (2000) *Lectures on the History of Moral Philosophy*, edited by B. Herman, Cambridge, MA, Harvard University Press. [ジョン・ロールズ『ロールズ哲学史講義 下』バーバラ・ハーマン編、坂部恵監訳、みすず書房、2005年。]
- Wood, Allen (2014) "The Evil in Human Nature", in G. Michalson (ed.), *Kant's Religion within the Boundaries of Mere Reason: A Critical Guide*, Cambridge, Cambridge University Press.
- 千葉 建 (2014) 「カント倫理学における道徳的動機づけの問題」『哲学・思想論集』39号、筑波大学哲学・思想専攻、73-84。
- (2015) 「カントの徳倫理学と感情の問題」『哲学・思想論叢』33号、筑波大学哲学・思想学会、87-100。

## 注

- (1) 「ローマの信徒への手紙」7章15節～19節、『聖書 新共同訳』日本聖書協会より。
- (2) 次の論文はデイヴィッドソンとの対比でカントの議論の優越性を主張するが、カントの議論自体の分析としては不十分なものとどまっている (Baumgarten 2002)。
- (3) 取り込みテーゼについては道徳的動機づけとの関係で考察したことがある (千葉 2014)。そこでは incorporate がドイツ語の aufnehmen (採用する) の訳語であることに鑑み「採り入れテーゼ」という訳語を用いたが、本稿では近年出版された邦訳にしたがって「取り込みテーゼ」に変更した。ただし、アリソンの『カントの自由論』からの引用は、邦訳も参考に著者が訳したものである。

(4) アリソンの「取り込みテーゼ」は、ロールズが「選択意志の原理」(principle of elective will)と呼ぶものと同様のものだが、ロールズは格率に採用されるものとして「三つの素質」——「動物性への素質」「人間性への素質」「人格性への素質」——を挙げている (Rawls 2000: 295[邦訳: 425])。

(5) 「心情」(Herz, heart) については McCarty (2009: 213, n. 17) を参照。なお、カントが悪への性癖の三段階に関する説明で「人間の心情」と「人間本性」の両者に言及するのは、それが個人的なものであると同時に人類に普遍的なものでもある点を示唆するためだと考えられる。

(6) 「最初の段階に関しては、カントの自由観(とりわけ取り込みテーゼ)を考慮すれば、カントがどうして道徳的な弱さの概念や、もっと一般にいえば「非故意の罪」の概念を受け容れられるのかが分かり難いように思われる。」(Allison 1990: 158[邦訳: 302])

(7) アリソンは、リースが道徳法則と傾向性との対立を、諸力の抗争ではなく、「合法的権威や政治的正統性をめぐる二党派間の争い」に喩えている点を評価している (Reath 2006: 18, Allison 1990: 158[邦訳: 240])。つまりそれは、心理的力の衝突ではなく、格率を選択する根拠をめぐる原理の衝突なのである。この点に関しては著者も同意する。

(8) バロンは、「脆弱さ」が完全なコミットメントを伴っている点こそが、第二段階の「不純さ」や第三段階の「邪悪さ」から区別されるゆえんだと示唆する (Baron 1993: 435)。

(9) マッカーティーが言うように、意志の弱さを「責任逃れのための言い訳」として解釈するのは、アリソン自身の説明ともそぐわないように思われる (McCarty 1995: 593, n. 11)。したがってそれは「自己欺瞞」というよりは「自己認知の歪み」と呼んだほうが適切だろう。

(10) カントの「道徳的動機づけ」理論における「法則採用の動機」と「法則遵守の動機」の区別については千葉 (2014) を参照。

(11) パルムクイストは「意志の弱さ」を、第一段階の「脆弱さ」ではなく、第二段階の「不純さ」に帰している (Palmquist 2016: 98)。こうした彼独自の解釈の背景には、悪への性癖の三段階を、カントが「善への根源的素質」として言及する「動物性の素質」「人間性の素質」「人格性の素質」に対応させるという見解があり、この点は考慮に値する (Palmquist 2016: 76)。しかしパルムクイストの解釈でも、第一段階の「脆弱さ」における動物的=反法則的な行為がいかにして「取り込みテーゼ」(および行為の責任)と両立しうるのかという問題は残る。

(12) マッカーティーは取り込みテーゼを放棄して、道徳的動機づけに関する別の(いわゆる情動主義的な)解釈を取る (McCarty 1995, 2009)。なお情動主義的な解釈については千葉 2014 も参照。

(13) カント自身も『宗教論』で神聖さの格率に関連して、「格率と行いとのおあいだにはいまだ大きな隔たり(Zwischenraum)がある」(VI 46) と述べており、法則採用と法則遵守の隔たりに言及している。

(14) ホルトンの「意図」および「方針」の概念はブラットマン (Bratman 1987) に由来する。

(15) フライアーソンも引用している Korsgaard (2009) を参照。

(16) フライアーソンはこれを道徳的責任の「経験的徴表」(empirical markers) と呼ぶ (Frierson 2014: 172)。これは道徳的責任の(十分条件ではなく)必要条件であり、責任の根拠は最終的には可知的性格やさらには超越論的自由に帰せられる。

(17) 「意志の弱い人は自らのコミットメントに忠実ではない」(Frierson 2014: 254)

(18) カントは『宗教論』で新しい人間が古い人間の罰を引き受けることの意味について説明している (VI 75)。

(ちば・けん 筑波大学)